



第 109 回例会 特別講演会

2023. **11/5** (日) 14:00~
札幌エルプラザ 4F 中研修室 (北8西3)

『カティンの森のヤニナ
独ソ戦の闇に消えた女性飛行士』
小林文乃 (著) 河出書房新社 2023.3



1936
Janina Lewandowska

私が書きたかったのは、女性が職業を持つことさえ難しかった時代に、空に憧れてパイロットになり、自分が選んだ道を精いっぱい生きた1人の女性がいたということです(著者インタビューより*)

小林文乃氏ご来札！ トークショーへご招待

特別ゲスト 富田武 成蹊大学名誉教授

どなたでもご参加いただけます。入場無料、定員50人

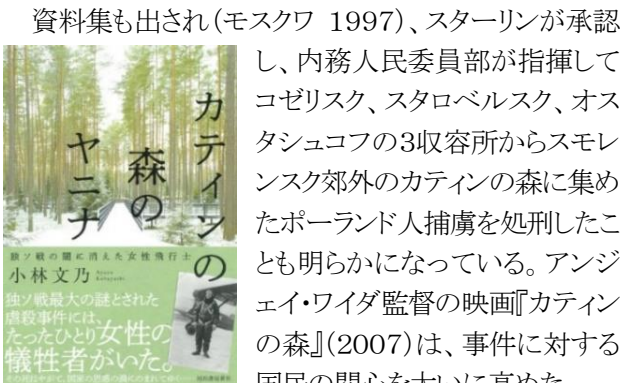
申込み(推奨)・問合せ先(安藤) 080-4071-0956, hokkaidopolandca@gmail.com

助成： ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO

後援： 北海道大学
スラブ・ユーラシア
研究センター

新刊
紹介

1940年春に起きた「カティンの森事件」は、ポーランド軍将校ら約2万人が殺害された事件として知られる。当初はドイツ軍の仕業と見做されていたが、ソ連保安機関によるものとの認識が広がり、1990年4月にはペレストロイカ期のソ連が自らの犯罪と認めるに至った。



資料集も出され(モスクワ 1997)、スターリンが承認し、内務人民委員部が指揮してコゼリスク、スタロベルスク、オスタシュコフの3収容所からスモレンスク郊外のカティンの森に集めたポーランド人捕虜を処刑したことも明らかになっている。アンジェイ・ワイダ監督の映画『カティンの森』(2007)は、事件に対する国民の関心を大いに高めた。

しかし、処刑されたポーランド人の中にただ一人女性が含まれていたことは、まったく知られていなかった。実は生き残りの証言があり、彼女の故郷では、英国で1975年に出版された本のコピーが回し読みされ(統一労働者党=共産党の支配下)少しずつ知られていた。彼女が何者であるかについては、カティン博物館でしか分かっていなかった。著者の小林はそれをザヴォドニーの『消えた将校たち～カティンの森虐殺事件』で知ったという。

探求熱心な小林は2019年6月カティン博物館映像コーナーで、その女性がヤニナ・レヴァンドフスカという、ポーランドの名高い将軍の娘であり、自らも飛行士だったことを知った。

ところが、ポーランド人自身がレヴァンドフスカのことを知らない。小林はオシフィエンチム(アウシュヴィッツ)を訪問し、ついでグダニスクの「第二次世界大戦

博物館」で、ヤニナには妹アグネシュカがいて、姉はカティンの森でソ連軍に、2カ月後に妹はパルミリの森でドイツ軍によって処刑されたことを知った。

ついで訪ねたポズナンはヤニナの父のムシニツキ将軍と縁が深く、彼が第一次世界大戦直後にドイツ軍残党を追い出した蜂起の指導者だったことも判明した。ヤニナはここで、当時のヨーロッパでの飛行ブーム(アレクシエーヴィチも『戦争は女の顔をしていない』で言及)の中で、女性としては珍しくパイロットになった。小林はポズナン郊外のムシニツキの故郷ルソーヴォヤ、2021年にはパルミリの森にも出向いている。

こうして小林はジャーナリスト、ルポライターらしい取材によって「カティンの森」事件に関する日本人の知見を大きく広げてくれたばかりでなく、18世紀末のロシア、ドイツ(プロイセン)、オーストリアによる分割以降のポーランド史の、ヒロイン一家にかかわる重要な出来事にも言及している。軍人ではムシニツキの同僚で独立回復の英雄ユゼフ・ピウスツキ、ムシニツキの部下でポーランド軍団を率いて第二次大戦で活躍したアンデルスが登場する。ヤニナの果たせなかった夢は、ポーランド人パイロットからなる「第303コシチュシコ戦闘機中隊」の対独戦で実を結んだとも言える(コシチュシコはポーランド第二次分割に抵抗した英雄)。史実の羅列ではない「物語としての歴史」である。

久しぶりにワクワクしながら読んだ本だ。札幌でのイベントを楽しみにしている。
(富田武)

著者：小林 文乃（こばやし・あやの）

1980年神奈川県生まれ。京都造形芸術大学卒業。ノンフィクション作家、出版プロデューサー

91年 TBS 特別番組の子供特派員として、旧ソ連時代のモスクワ取材。2004年 広島牧師・谷本清の長女・近藤紘子氏の著作のプロデューサー・構成を担当、『ヒロシマ、60年の記憶』として刊行され、以降多くの書籍の出版・編集に携わる。BS フジドキュメンタリー番組「レニングラード～女神の奏でた交響曲」を企画・プロデュース。18年『グッバイ、レニングラード～ソ連邦崩壊から25年後の再訪』（文藝春秋）を刊行

特別講師：富田 武（とみた・たけし）

1945年福島県生まれ。東京大学法学部卒業。成蹊大学名誉教授。ロシア・ソ連政治史、日ソ関係史

著書『シベリア抑留者たちの戦後～冷戦下の世論と運動～1945-56年』（人文書院 2013）『シベリア抑留～スターリン独裁下、「収容所群島」の実像』（中公新書 2016、アジア・太平洋賞特別賞）『日本人記者の観た赤いロシア』（岩波書店 2017）『シベリア抑留者への鎮魂歌』（人文書院 2019）『日ソ戦争1945年8月～棄てられた兵士と居留民』（みすず書房 2020）『抑留を生きる力～シベリア捕虜の内面世界』（朝日選書 2022）『日ソ戦争～南樺太・千島の攻防』（みすず書房 2022）ほか多数

著者インタビュー 『カティンの森ヤニナ』 小林文乃氏

「カティンの森のヤニナ」。外国のおとぎ話を思わせるタイトルだが、独ソ戦のさなかに非業の死を遂げた女性飛行士を描いたノンフィクション。彼女の祖国ポーランドの歴史紀行でもある。

「カティンの森事件」とは、第2次世界大戦中に、ソ連の捕虜となっていた2万数千人のポーランド人将校が大量虐殺され、埋められた事件をいう。当時、ドイツに占領されていたモレンスク近郊のカティンの森で見つかった遺体の山の中に、たったひとり、女性の犠牲者がいた。空軍パイロット、ヤニナ・レヴァンドフスカ、32歳。そのことを知った著者は、ヤニナの存在に強く引かれた。

「以前から独ソ戦の女性兵士に関心があって、調べていたんです。それに、私は飛行機が大好きで、セスナで初心者教習を受けたこともあるので、あの時代の女性がなぜパイロットに？ という興味もありました」

ヤニナのことをテレビのドキュメンタリー番組にしたいと思い、企画書を書いて持ち歩いたが、誰も興味を示してくれない。第一、情報が少な過ぎた。「これはもう、現地に行くしかない」と、2019年6月、著者は単身ポーランドに旅立った。

「ポーランド人にとって、日本は果てしなく遠い国なんです。そんな国から1人でやって来て、ポーランド人もほとんど知らない女性のことを一生懸命に調べている。その熱意が伝わったのか、人に会うたびに新しいつながりが生まれて、次の扉が開かれていきました」

ヤニナゆかりの地を訪ね、そこで出会った人たちの言葉を一つ一つすくい上げていくうちに、壮大なファミリーヒストリーが浮かび上がってきた。ヤニナの父ムシツキ将軍は大ポーランド蜂起を指揮した総司令官。10歳下の妹アグネシュカはワルシャワでレジスタンスに加わり、ナチスに虐殺された。パイロットだった夫ミエチスワフはイギリス軍と共にドイツとの空中戦を戦い、戦後は共産主義化した祖国に戻ることを拒否してイギリスで生涯を終えた。

「ファミリーヒストリーが、そのままポーランドの歴史になってしまう。ポーランドという国を象徴するすごい一族だと思います。3部作にしたかったくらい(笑)」

ヤニナへの旅は、東欧の複雑な歴史に分け入る旅でもあった。

「今のウクライナ戦争も、長い歴史の流れの中で起きたことです。悪い大国が急に小国に攻め入ったという単純な構図ではありません。それを少しでも知る手がかりになったらいいな、と思います」

陰惨な事件を扱った作品なのに、読後感は不思議なほど爽やかだ。歴史の闇に葬られていた1人の女性の息づかいが確かに聞こえてくる。

「私が書きたかったのは、女性が職業を持つことさえ難しかった時代に、空に憧れてパイロットになり、自分が選んだ道を精いっぱい生きた1人の女性がいたということです。この本を閉じたとき、強く前向きな気持ちになっていただけたらうれしいです」

（河出書房新社 2552円）